いのちと地域を守る

3.11そのとき　花渕浜自主防災会副会長　鈴木 亨さん(59)

住民の安全確保や情報収集、物資の配布

日頃の活動が生きる

民家に開設した花渕浜自主防災会の防災本部。救援物資の配布や情報発信などを行い、地域の生活再建の拠点となった　＝2011年３月25日（七ケ浜町提供）

宮城県が震災前に想定した宮城県沖地震の花渕浜の津波高は最大3・3メートルでした。自主防災会ではその高さを目安に、12カ所の一時（いっとき）避難場所を指定していました。

その一つ同性寺には、本震の後、私を含め住民47人が集まりました。私は、ラジオで津波が5メートル以上に達することを知り、高台の墓地に二次避難することを決めました。寺に津波とがれきが押し寄せたのは、全員が移動した約20分後でした。

反省点を話し合う

自主防災会は、震災2日後の3月13日に活動を始めました。活動拠点のはずだった地区公民館分館が津波で流失したので、近くの民家に本部を開設しました。

住民の安否確認や情報収集、物資の調達・配布など業務はたくさんありました。当初は人手が足りずに混乱しましたが、活動日誌を記し、反省点を全員で話し合って、日々改善を図りました。優先順位と担当を決めると、各業務がスムーズに動くようになりました。

安否確認の担当者は各戸を訪ね、2週間以上かけて全世帯分を把握しました。広報の担当者は役場から新しい情報を得て、掲示板に張り出しました。

救援物資の配給は町から全世帯分をまとめて受け取り、各戸に均等に分けました。高齢者らを除いて本部での受け渡しを原則とし、地区を回って配布の時間や場所を周知したところ「物資が届かない」という不満の声はほとんど上がりませんでした。配給軒数は27日間で延べ4000を超えます。

全世帯参加し訓練

自主防災会は震災前から、宮城豊彦東北学院大教授の指導を受けて、災害への意識を高めてきました。毎年、津波の発生を想定した全世帯参加の避難訓練も行いました。

メンバーは、自分たちの命を自分たちが守るという心構えで活動していました。訓練の反省会だけでなく、日ごろの懇親会などでも防災を話題にしていました。震災当日、高台への二次避難を選択して多くの避難者が安全を確保できたのは、これらの経験が生きたからだと思います。

防災会が活動を終えたのは4月15日です。役員約30人の半数が自宅流失などの被害を受け、被災当事者でもありましたが、会の活動に率先して取り組む人もたくさんいました。「地域のため懸命に責務に当たる姿が、防災会への住民の協力につながった」と言ってくれる住民もいました。

■むすび塾に参加して ―― 宮城・七ヶ浜町花渕浜地区

【活動のこつ】防災会のメンバーでよく飲み会をしている。防災でも何でも楽しくなければ続かない。若い世代も入りやすい雰囲気が会にあると思う。
＝自主防災会副会長・鈴木亨さん(59)

【役立った活動】一時（いっとき）避難場所を指定していたことが良かった。人がいれば情報も集まり、その後の行動や対策を相談できる。訓練も生きた。
＝会社員・鈴木茂之さん(55)

【震災時の活動】消防団として夜間も巡回パトロールをした。盗難を少しでも減らせたのではないか。
＝会社員・遠藤裕之さん(44)

【活動のこつ】防災会のリーダーたちは、自分も被災したにもかかわらず、住民のために任務を全うしようとしていた。そんなリーダーの姿を住民が見て、協力した。
＝団体役員・相沢豊さん(62)

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。
第13回「むすび塾」は14日、男鹿市船越の荒町地区で開催します。

減災・復興支援機構理事長　木村 拓郎さん

若者育て取り組み継続を

花渕浜地区では自主防災会の以前からの取り組みが生き、震災の被害を食い止めることができた。今後も活動を継続するには、ハード、ソフト両面でやることがある。

まず、自主防災会の新たな拠点となる集会所のような施設整備を自治体に求めるべきだ。食料と水を保管する防災倉庫や、ある程度の台数を止められる駐車場もあれば、いざという時に役立つ。

ソフトでは、震災の教訓を基に、行動マニュアルを作ることを勧める。例えば、お年寄りや体が不自由な在宅避難者の家の片付けや、食事の配給などの生活支援をどうするか、住民の力で避難所をどう運営するか。地域としてできることを検討してほしい。

花渕浜地区の将来を考えた時、復興計画に中学生や高校生が加わることが望ましい。街づくりに参加することで、地域への愛着や防災、減災の心構えを育める。

活発な自主防災会には熱心なリーダーがいる。リーダーがいなくなった後に、活動がトーンダウンしないよう、大人たちが守ろうとしている地域の「魂」のようなものを下の世代に日頃から見せてほしい。